

## 下痢について

東京医科大学病院漢方医学センター

及川哲郎

便秘に続いて今回は下痢のお話です。

漢方医学では下痢を泄瀉（せっしゃ）と痢疾（りしつ）に分けて考えています。泄瀉とは胃腸虚弱に伴う慢性の消化不良性下痢を指します。冷えや体力低下を伴う（漢方医学では陰証と呼んでいます）ことが多いです。そのため、消化管を温め消化吸収力を高める漢方薬を処方することになります。一方の痢疾は、感染性腸炎や炎症性腸疾患などに相当し、炎症と熱を伴う（漢方医学では陽証）ことが多いと考えられます。したがってこの場合は、消炎・抗菌作用を有する漢方薬を用いることになります。ただ、痢疾に対しては点滴や抗生物質、あるいは炎症性腸疾患であれば診療ガイドラインという標準的な治療の指示書に従った治療が優先されますので、漢方を用いる機会は泄瀉のほうが圧倒的に多くなります。現代医学的にはやや不得意な領域になるからです。なお下痢も便秘と同様、状況によりまずは悪性腫瘍等の病気を除外することが重要です。特に体重減少や血便を伴うような場合は、必ずかかりつけ医などに相談してください。

下痢の漢方薬をいくつかご紹介します。まずお勧めは真武湯です。高齢者・虚証の泄瀉に用い、冷えや倦怠感が強いことが使用目標となります。下痢症はもちろん、経管栄養に伴って起きる下痢などにも有効です。桂枝人参湯という処方もあり、これは感冒性胃腸炎で頭痛や発熱などのかぜ症状と下痢が併存する場合に使います。桂枝加芍薬湯は過敏性腸症候群によく用いる処方で、腹痛を伴う下痢に頻用します。五苓散もよく効きます。口渴と尿量減少などを目標に痢疾、といっても細菌性ではなくウイルス性胃腸炎などで嘔吐や下痢を呈するものに用いることが多い処方です。慢性の下痢症、つまり泄瀉に対して用いる代表的処方の一つに啓脾湯もあります。整腸剂的に幅広く使える処方ですが、真武湯に比べ冷えは少なく全身状態は良いのが特徴です。最後に半夏瀉心湯です。痢疾と泄瀉の双方に対応し臨床試験や研究報告も多く、ある意味一番注目されている漢方薬です。若年者を中心にストレスなどで下痢する場合に用い過敏性腸症候群にも有効です。お腹がゴロゴロというのがひとつの使用目標とされています。

体質的に下痢をしやすく困っている場合、あるいは西洋医薬や整腸剤のみではなかなか下痢が改善しない場合などには、漢方治療を考えてみてはいかがでしょうか。